

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 81 号

平成 21 年 1 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

(柳生直行訳・ヨルダン社) より (8)

6 月 11 日 やさしい方法はない (1)

偉大な人物は何でも簡単にやってのける、と思っている人が多いが、これは幻想である。インスピレーション(靈感)ということがよくいわれる。インスピレーションが湧くと、なんにも努力しなくても、どんなことでもできてしまうというわけである。だが、事実はまさにその反対であることを、すべての証拠が示しているのである。

…バイロンとテニソンといえは詩作の技巧の巨人匠と考えられる詩人たちであるが、実は、彼らは二人とも押韻辞典をつねに使っていたのである。

* 押韻辞典 詩の各行の終わりの音を合わせることを押韻という。そのための辞書。たとえば “love” を引くと “dove”, “above” と出ている。

彼らの押韻語は、完全な必然性を持って出てきているように思われる。努力なしに全く自然に収まるべきところに納まっているように見える。だが多くの場合、それは辞典を片手に、適切な単語を探す大いなる労苦の結果だったのである。

とりわけ抒情詩人は、全然努力することなしに直観的な容易さで小鳥のように歌うもの、とあなた方は思っておいでだろう。ところが、あの偉大なアイルランドの詩人 W・B・イエーツは、病後の

無活動の時期に、レディー・グレゴリーに大変な世話になった、とつぎのようにいっているのである。「わたしは彼女に、毎日 11 時に私を仕事場に追いやってくれるように、また何時かに手紙を書くように命令してくれるように頼んだ。必要とあらば、私を怠けものと呼んでくださってもいい、といった。彼女の断固たる態度とお世話がなかったならば、私は大したこともできずに一生を終ったことだろう。抒情詩人が午前 11 時に無理やり机の前に座らされるというのは、はなはだ奇妙なことに思われるだろう。しかし、それが大詩人の仕事のやり方だったのである。

短編小説の名手バルザックは、自分ことを「落盤で閉じ込められた鉱夫のように、命がけでつるはしをふるう」人間のようだとっている。文章が自然に流れ出るといった調子は、そこにはみじんもない。

フランスの小説の巨匠フローベルもまた、自分についてこう語っている。「病気で、いらいらして、一日に何百回となくはげしい苦痛におそわれたが、ほんとうの労働者のように苦しい仕事をつづけた、そう、そでをまくり上げ、額に汗して、雨でもあられでも雷でも、鉄床（かなどこ）をたたきつづける職工のように。」

インスピレーションの結果だと人びとが思う仕事は、実は、額に汗する労苦と心の格闘の結果だったのである。

6月13日 禍を福とせよ

状況はあなた自身が作るものである。同じ状況が不運ともなり祝福ともなる。

ある学校教師がその自伝の中で、一生忘れられないこととして、つぎのような話を書いている。あるフットボールの練習試合で、下級生の少年が不自然な格好でドサッと倒れて腕を追ってしまった。右腕だった。

救急車を待つ間に、その少年は紙と鉛筆を貸してほしいといった。「こんなときに、何のために紙と鉛筆なんかが必要なんだ」とみんながたずねた。少年の答はこうだった。「なんでもないさ。ただ、右腕が折れちゃったので、左手で字を書く練習をすぐに始めたほうがいいと思ったんだよ」

腕が折れてもこの子は落胆しなかったのだ。

どんな状況も一つのチャンスであることを忘れてはならない。

不幸不運と見えることがわれわれにも起るだろう いやすでに起こっているだろう。だがわれわれがそれを災いとして受取らない限り、禍なるものはない、ということをおぼわぬようにしよう。万事を益となるようにしてくださる神を信ずるなら、すべての仕事はわれわれにとってチャンスなのである。

6月16日 子供たち

子供の持つ魅力はどこから来るのか。

信頼の心。

子供は疑うことを知らない。本能的に人を信ずる。世界には友達がいっぱいいると信じている。そして、信頼は信頼を生む。ちょうど疑惑が疑惑を生むように。

子供は心から楽しむ。

子供にとっては、単純なことも驚嘆すべきことと思われる。年をとるにつれて、驚異の念がうすらぎ、その代りに退屈と生気のない習慣がやってくる。これは人生の悲劇である。子供を喜ばせ、その顔を輝かせるのは、いとも簡単である。

この世から実際に驚嘆に値するものが消えてしまうのではない。神の創りたまえるものには驚嘆すべきすばらしさがあり、また神の愛があるからである。ただ、見る眼をもっていなければ見えないというだけのことである。「神さま、私の脅威の念が消えないようにしてください」 これはよい祈りである。

感謝の心。

年をとるにつれて、なんでも当たり前のことに見えてくる。だが子供は、自分に注がれた関心に対して、ありがたいという感謝の気持をはっきりもっている。... 他の人びとや神がわれわれのためにしてくれることに対して感謝を忘れるようになっては、もうおしまいである。

子供の無邪気さ。

子供は善良なものである。よく親たちが言う「悪い子」になることもたしかにある。だがそれを超えて、あるいはその奥に、まだ汚されていない無垢がある。それはわれわれが失ってしまったものである。われわれはそれが忘れられず、つねにそれにあこがれている。

成長してもなお子供の善良さと愛らしさをもちつづけるには、キリストの恵みと力によるほかはないのである。

6月17日 助けてやりたくても

「助けてくれなくてもいいというのでは、助けてやりたくても、助けようがないではないか」

これはよく親が子供に言うことである。

親は人生のことをよく知っている。前から人生の道を歩いているからである。親は人生の途上にある危険、落とし穴、誘惑を知っている。だから、何よりも自分の子供をそういうものから守り、助けてやりたいと思う。ところが子供は往々にして、わが道を行き、自分の考えに従っていかうとする。...

これはよく先生が生徒にいうことである。

教師が生徒のためにやってやりたいことはたくさんある。教え、導き、訓練してやりたいと思う。この子はきっと大学者になる、と思うことだってある。だが生徒は、先生の忠告を受け入れず、先生のことばに集中せず、やればできるのに勉強しようとしなない。そこで先生は、残念そうに、こう嘆くのである。...

これは時々医者が患者に言うことである。...

これは神がつねに言っておられることであるに違いない。

あらゆる神秘の中で最大のものはおそらく意志の自由の神秘であろう。神はご自分の意志をわれわれに押しつけることはできない。

...

イエスはその生涯の最後の週にエルサレムにこられたとき、この町を見おろして、こう嘆かれたのであった 「あたかも、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはお前の子供たちを、幾度集めようとしたことか。だがお前たちは私に耳をかそうとはしなかった」(マタイ 23・37)

キリスト教の第1の条件は服従である。われわれが服従しないなら、神は、悲しげに、こういいたもうのみである 「私を拒むのでは、助けようがない」。

6月19日 親切であれ

确实には知ることのできないものがたくさんある。またわれわれ人間には絶対に知ることができないものも、少なくない。しかし、「人が困っているときには親切を、自分が困ったときは勇気を」ということが、クリスチャン生活の1要素であることを、われわれは知っている。

神学者たちが、「おばあちゃんや猫に親切な」(と彼らがいう)ことを身上とする宗教を、軽蔑の眼を持って眺めていることは、わたしもよく知っている。しかし、神の親切さを人々の生活の中で実践した人が、神の国から遠いはずがない。

古いスクラップブックを見ていたら、こんな詩行が出てきた。

学者たちは問う、「キリストは何語を話したか」。

彼らは議論をし、異を立て、探り、証明できることはごくわずか。

ああ賢者たちよ、汝らのシリヤ語とギリシア語を捨てよ！

汝らの求める知識は人の心のうちにある、

キリストが話したのは世界の共通語 愛だったのだ。

究極的には、私は、神学者でなかったが親切だった人と、運命をともにしたいと思う。

6月24日 うるさい奴

人類のために大きな貢献をした人たちはみな、うるさい連中であつた。...

イエスは天国をパンだねにたとえ、パンだねを練粉の中に混ぜると、それはふくらみ、泡立ち、やがて噴出す、といった。(マタイ 13・33)

テサロニケ人はクリスチャンを、「世界をかきまわす人」と呼んでいる。(使徒行伝 17・6)

非難や批判をうるさいと思わず、むしろ祝福として考えるのが改善への道である。

「どうもありがとうございました」と司会者がいった。「うるさいことをいってくださいまして」。批判に耳を傾けようとしない人は、自分の欠点が見えず、従ってこれを克服することもできない。心を乱されるのを望まない人は、イエスの臨在に耐えることができない。

...

世界を助けようと思う人は、うるさい奴といわれるのを覚悟しておかなければならない。また、助けてもらいたいと思う人は、批判を受け入れる雅量と謙虚さを持っていなければならない。非難されても恨むことなく、キリストの光に照らされて己れの欠点を知り、キリストの恵みによってこれを克服し、かくしていっそう高い人格へと昇っていかなければならない。

6月25日 名前

偉大な名前にはなにかこれに付着しているものがある。...

たとえ遠くからでも偉大なものに触れると感動を覚えるものである。...

われわれすべてのものが共通に持っている一つの名前がある
「クリスチャン」という名前である。

有名なチーム、有名な学校や大学の一員であることは素晴らしいことである。その名前そのものが、高潔さと偉大さへの刺激と義務とを与えてくれるからである。

クリスチャンという名前についても同じことが言える。それは異教世界の知らない相互的な愛と交わりとを表わす名前だったのである。「クリスチャンがお互いに愛し合う姿を見よ」と、異教徒たちはいっていたのである。

それはまた、他の人々には理解できない不動の忠誠を表わす名前でもあった。クリスチャンという名前は、頑固な勇気とキリストへの不拔の忠誠とを表わしていたのである。

7月1日 本の中の本

あるとき私はオックスフォードの聖書翻訳委員会に出かけていった。ところが、わたしのバッグには、一番大切なものが入っていなかった。英語の聖書を忘れてきてしまったのである。そこで私は街へ聖書を買いにいった。家に帰れば聖書はたくさんあるので、あまり高いのを買いたくはなかった。

たまたま、おそらく史上最廉価の聖書にぶつかった フォンタナ版の改定標準役で、印刷はすばらしいし、ペーパーバックながら美しい装丁で、しかもわずか40ペンス(約100円)なのである。実際に手にとって見るまで、そのような版があるのをわたしは知らなかった。それはわたしの知る限り、世界最高の本につけられた最低の値段であった。

そこでわたしは考え込んでしまった。...

昔は本というものは手で書き写されたものであった。優れた写本が筆写されていた第4世紀には、筆記者たちに支払われる筆写代の基準が決まっていた。筆写される本はスティコイ(stichoi)に分けて計算された。(スティコイとは、大体6歩格の詩の長さで、16音節と勘定されていた。そこで、今本は何スティコイの本だ、という風に分類されたわけである。)

(4世紀の始め公にされたローマ皇帝の勅令によると)100 スティコイが大体100ペンスだった。

さてマタイ福音書は、2,600 スティコイ、ルカは2,900、そしてヨハネは2,000である。つまり、4福音書だけで9,100 スティコイとなり、当時4福音書の写本を一部手に入れるだけで91ポンド払わなければならないわけである。パウロの手紙について土曜に計算をやってみると、50ポンド(6,500円)を超える値段となる！ところが今は、新旧訳あわせて50ペンス(65円)以下で買うことができるのである。

注 1ポンド=130円、1ペンス=1.3円で換算した。

7月6日 漂流(2)

ストア派の哲学者たちは、徳は精神の努力によって勝ち得られる、と強硬に主張した。人は歩くことによって歩けるようになり、走ることに追って走れるようになり、読むことに読めるようになり、書くことによって書けるようになる。それとまったく同様、有徳であることによって徳を身につけることができるのである。これがストア派の考えであった。...意志さえあればなにかが起きる、改革も実現される。反対に眠りこけていれば、一切は失われる。破滅も救いもともに自己の力の及ぶ範囲にあるからだ。

これがストア派の、努力の重要性に関する主張である。われわれはオールを手にとって、流れに逆らってこがなければならない。たとえ手は水ぶくれになり、心臓は破滅しそうになろうとも。きびしく決意を固めた意志力がどれだけ大きなことをなしうるか、ということのをわれわれはまだ本当にわかっていない、という意味で、このストア派の考え方にはかなり真実が含まれているといえる。

しかし、この問題にはもう一つの側面がある。意志の戦いに敗れる様が古典的な形で、ローマ人への手紙第7章に書かれている。

「...正しいことをやる医師はあるのだが、それがどうしてもできないのだ。...」

まさにこの時、キリストが登場してくださるのである。イエス・キリストの動力が人に力を与えて、自分だけではとうていなり得ない新しい人間となら閉め、また一人では絶対になしえないことをなさしめてくださるのである。われわれが、あるがままのわれわれである限り、われわれの意志は自由でなく、鎖につながれている—これが人生の根本問題なのだ。その意志を自由にしてくれるものは、キリストの力のみなのである。

漂流することは死ぬことである。戦いつつ正しい道を歩むことを、われわれはしっかりと意志しなければならない。しかし、キリストの力によってのみ、正しい道を選びまたこれを歩み続けることができるのである。